

編集室から

今年の冬は寒さが厳しい天候でした。つい先日もこの時期には珍しく、しっかりと雪が降りましたが、交通機関に乱れが出るほどではなく、まさになごり雪。数日後には春を思わせる気温と、快晴が広がりました。

この時期の金沢は、快晴となっても遠景がハッキリせず、朧な風景となります。大陸からの黄砂の影響で、大気が霞んでしまうのです。これがまた、街の風情を醸し出すのですから、不思議です。

この街に最初にやってきたのは大阪で一浪した翌年。以来30数年になります。

街の中心部に兼六園・金沢城という桜の一大名所があり、やはり中心部近くの東西を流れる二つの川、女川とも呼ばれる浅野川、男川とも呼ばれる犀川ともに見応えのある桜並木が続いています。さらに、少し小路を入ると昔ながらの町屋がそこかしこに残っています。3つある旧茶屋街の近辺を歩くと、「空から謡いが降ってくる」とも称されるように芸子衆の唱・三味線の練習が漏れて聞こえます。

魅力的な桜の風景を求めて訪れたい他の街も少なからずありますが、こればかりは開花時期と天候に左右される（特に日本海側）ので、余程のご縁が無ければ中々巡り逢えるものではないのかもしれませんが。だとすると、この金沢という街にご縁を頂いている幸せもしみじみと感じるのです。

昨年お邪魔した被災地、陸前高田市では津波が到達した地点をつないで桜並木を植え始めた人々がいます。いざとなったら桜より高いところに逃げよとの思い。いつしか叢に埋もれてしまう石碑ではなく、毎年咲き誇る桜に託した思いが、偲ばれます。桜には命が宿るとも申します。亡くなった大勢の方々の想いをも汲んで、桜はこれから咲き続けるのでしょうか。（は）



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2012/04
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2012/04
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

卯月



兼六園にて
by hama

寄稿 『行政がFacebookに取り組み理由』

中央美術印刷株式会社 代表取締役社長 今川 弘敏

二〇二二年三月十九日に私が住んでいる金沢市の公式フェイスブックページの試験運用が開始されました。その名も、いいね金沢【金沢市役所】。今年の二月二十二日に山野市長の指揮の下、二十代の若手から四十代の中堅職員が各部署から選ばれ十四人からなるフェイスブックプロジェクトチームが発足され、その約一ヶ月後の立ち上げです。

たった四日間でファン数千六名となり、石川県のフェイスブックページのファン数ランキング一位の八番らーめんの千八百七十九名に迫る勢いです。(三月二十二日現在) コンテンツも身近な話題やお知らせを写真を取り入れて分かりやすく発信していて好感がもてます。その証拠に試運転段階ですがファンからのレスポンスもとても良いです。

ところで、そもそもなぜ行政がフェイスブックページを持つ必要があるのでしょうか。もつといえ、なぜ行政がソーシャルメディアを活用する必要があるのでしょうか。

企業がソーシャルメディアに取り組み第一義的な意味は「顧客との会話と関係性」の構築と言われています。先日開催されたフェイスブックジャパン主催のFMCでもグローバル・マーケティング・コミュニケーションのディレクター、フェザー・フリーランド氏は「マスコミの発達で薄れてしまった、店主と顧客の会話と関係性を取り戻したい。」と、フェイスブックが目指すマーケティング・ビ

ジョンを語りました。

このような視点は企業のみならず社会に存在する組織について全てに当てはまることだと思います。つまり、企業だけではなく行政も同様に顧客である市民との「会話と関係性」を構築していく時代に変化してきているということです。

では、行政が構築すべき市民との「会話と関係性」とは何でしょうか。それは、各市町村ごとに目指すべきビジョンがあると思いますが、本質的には行政サービスはそもそも市民の為にあり、そんな市民の声に真摯に伝えていく為の「会話と関係性」を構築していくことが大切だと思います。ソーシャルメディアは、顧客である市民と行政が対話・交流する「場」になり得るということです。

時にはそこで交わされる会話は行政サービスに対する辛辣な意見も含まれると思います。けれど、それに応えていくことが行政サービスの向上に繋がり、それがより良い社会に変化するひとつの原動力になると思います。この辺りが行政がフェイスブック等のソーシャルメディアを活用する最も大切な理由だと思います。今後の金沢市のフェイスブック等のソーシャルメディアに対する取り組みに注目と期待をしていきたいと思えます。



【プロフィール】

(いまかわ ひるとし)一九七二年十二月十二日生まれ。アナログとデジタル両面から販売促進を支援。特にソーシャルメディアの活用に取り組む。

濱のつばき 『春まじり』

集落の祭りは、春と秋にある。近郷のすべてで秋ではなく春祭りに神輿と獅子舞を出す。獅子舞を催すのは青年団の役割で、獅子を操る天狗役は、主に幼い子どもたちである。能登にご縁を頂いて三十年近くになる。その間、能登半島地震などの被災年を除いて、毎年ほとんど途切れることなく行われ続けてきた。その獅子舞の存続が深刻な危機を迎えた。

原因は青年団員の激減で、今年はどうとう二名になった。団員となる年齢の男子が集落に居ない訳ではない。数週間前から毎夜練習が続く。幼子の面倒を見ながら数々の演舞を教え、集落各戸に奉納を願い出て、舞わせて貰わねばならない。それによって、花と呼ばれるご祝儀が彼らには入るのだが、人の世話自体が面倒という若者は、入団を拒む。

自分のように酒を酌み交わす喜びを、単純にそれとできない個の価値観。それが蔓延しているのは、都市ばかりではない。

二人の息子は、県外に居る。富山で働く次男は、幼少の頃から獅子舞が好きだった。かつて長男以外は天狗をさせて貰えなかったが、次男の時代で人手不足から因習が緩和された。以来、要員として就学・就職後も毎年、依頼されては帰省して、練習・本番を迎えている。

最も難しい舞を担当するのは、大天狗という。装束がらすべてが違う。これを過去に二度担当した。そして今年、二度目を担当するという。次男の大天狗も例外なら、

三度も担当することも異例である。これだけでは無論、獅子舞はできない。能登の獅子舞は、頭以外に五名ほど蚊帳に入る「長い獅子」である。総漆塗りの重い頭は一舞で交代せねば、とても振れるものではない。少なくとも十数名の協同演舞なのである。その応援を誰がするのか。集落では延々議論を重ねてきた。こういつとき、過去の経緯を踏まえたべき論・筋論を滔々と主張する者に、衆論はなびく。本心は単に面倒であるに過ぎないが、それを巧妙に隠して立てられる擬似正論に村は難渋した。最後は壮年団が協力することで辛うじて今年の催行は可能となったものの、壮年団長が代わる来年で以降の継続はかなり難しいかも知れない。

春祭りの前週、村人総出で道普請をする。農繁期を前に、冬季に痛んだ集落道を自主的に補修する共同作業である。さらに泥で埋まり、枯れ草が流れを阻害している田の用水路も整備する。当たり前のようにして来たこれらの行事も、要領よく欠席する不届き者がジワリと増えてきたため、出不足金と呼ぶ罰金を課することに決まった途端、出席率が格段に向上した。損得勘定の尺が、余りにも短い。

能登の格言の一つ「仕事は大勢。ご馳走は小勢」。村の仕事は大勢で掛からねば、努力負担も時間も相当なものになる。そのことを最もよく知る人々の心が今、崩壊しつつある。集落の限界化は、高齢化率よりも、むしろ意識の短視化からもたらされる。本来、命の芽吹きを寿ぐ祭りは、その事をあぶりだしてくれているかのようだ。

きただより51 弘前大学地域社会研究会 上村 康之
『「秋入学構想」導入による地方私立大学の危機』

東京大学は「秋入学構想」を打ち出し、旧帝大等の国立9大学、早稲田大学、慶応義塾大学などと懇話会（以下、懇話会と略）を設立、5年後の秋入学に向け動き始めた。全国には大学、短大が国公立あわせて1,000校以上あるが、明確に反対を打ち出したところは筆者の知る限りにおいてないようだ。経済界も概ね賛成の意向で、どうやら「秋入学」は実施されそうな様相である。やはり、東京大学が言い出し動き始めると、NOは言えない空気が流れているのだろう。

秋入学構想の狙いは、大学の国際競争力の強化である。実際には、半年入学及び卒業をずらすことにより、留学生（とりわけ欧米を指しているように思える）の受け入れ増加を図れるとし、交換留学生のしやすさ、研究レベルの向上、海外の大学との研究教育の活発化などが図られるというメリットがあるとしている。

しかし、秋入学を「国際競争力の強化」で押していけるのは、先の懇話会に加盟する大学や、関東や関西の知名度の高い私大くらいであろう。地方の大学、とりわけ低偏差値で定員割れを起こしている地方私立大学（以下、地方私大とする）では、「国際交流」を売り文句にしているところが目に付くが、主にアジア諸国を中心に学生の量的な確保であり、研究者志向での進学はほとんどないといってよい。大学入学時期も各国でまちまちであり、例えば日本における出身国別留学生数2位の韓国が3月、タイが5月、フィリピンが6月であり、これらの国々から日本に留学しやすくなるわけではない。

また、「秋入学」の学生のメリットとしては、入学までの半年の時間差が生じる「ギャップターム」と呼ぶこの期間を通じて「海外留学やボランティア活動などで多様な価値観を育ててほしい」としているが、地方私大では幻に近い話である。日本人の学生の入試は学力試験を課す一般入試から、「学生選抜の多様化」といえば聞こえはいいが、推薦入試・AO入試など、実質無試験に近い入試による入学者が大多数を占めてきており、学力低下の懸念どころか、なぜ大学生にという学生も少なくない。だが、そういった学生を一人でも多く拾っていかねれば、学生確保ができない厳しい現実がある。それも、ほとんどの学生が年明け前の推薦入試、AO入試で合格してしまうため、半年どころかほぼ1年近くの空白を生じる学生もかなり出てくる。入学まで学生にモチベーションを与え続けることも大きな困難が予想され、結局は、入学前教育と称する高校の復習授業が強化されることだけにもなりかねない。

「秋入学」を一斉に実施すると、確実に大学間の格差は今まで以上に広まる。地方私立大学の多くは相当ふるいにかけて、危機的な状況がいま以上に顕在化していくであろう。懇話会に入っているような大学と、地方私大をはじめ他の大学も一括して、秋入学スタートには危惧を感じるのである。

『保育園の入園にここまでするか？』
株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

前回は私の娘の話きっかけに「保育施設に見る日本の少子化対策の不十分さ」について噛みついてみました。娘の認可保育園の二次選考にも結果として漏れてしまい、当分は近くの無認可に預けながら空を待つことになりそうです。

今回は子供を保育園に入れるために「ここまでするか？」という強者達をご紹介します。よく聞くのが

- ・県議会議員のコネを使う。区議会、市議会のコネは逆効果が多いらしいです。
 - ・知り合いの会社に勤務しているという架空の証明書を出してもらう
- というのがありますが、こんなものは序の口の序。そうワンパク相撲レベルです。

衝撃度の高かった3つの事例を順にご紹介します。

3位 某宗教団体に入信

これは妻の友人の友人（ありがちですね）なのですが、2歳の息子さんを保育園に入れるために、某宗教団体に入信しました。ここは怪しい宗教団体ではないと思うのですが、系列というか息のかかった保育施設が都内を中心に十数施設あります。0歳の時から認可保育園に入れず、無認可のコスト負担の問題やお友達の誘いもあってこのような決断をしたそうです。国政、都政がいたらないところをカバーしているという見え方もできますし、ある側面ではこのような現状をビジネスチャンス（=信者拡大）として活用しているとも考えられます。

2位 保育所申込み前に離婚

母子家庭はポイントが高いため、子供を保育園に入れるためだけの理由で離婚するご夫婦もいるそうです。そして入園後にまた再婚するというパターンだそうです。実はこのケース最近非常に多いそうです。ここまで来ると結婚、離婚ってツールなんだなあ。

1位 両親を要介護者に仕立て上げる

これは極め付けの事例らしいです。決して両親を痛めつけるという意味ではなく要介護申請をし認定調査を受けさせて要介護度2あたりを取るそうです。それによって、入園審査において心象がよくなるため要介護申請する方がいたという話を世田谷区の保健師さんから聞きました。ですが実際はピンピンしているそうなんですよ。親だけでなく祖父母も巻き込んでの裏工作です。うちは双方の両親ともに自宅から距離があるところに住んでいるためこの方法は無理そうですね。

とまあ、国の至らなさを国民の努力と知恵で補うというのは、これまでの日本の経済成長の原動力にもなってきたわけですが、ここまでくると「真面目にやっている人が馬鹿を見る」という最低な世界になってしまいます。小宮山厚労大臣、タバコ税の値上げに執着するのもいいですが、新たに生まれてくる命を育む政策に、もっと尽力してくださいよー。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

新潟・佐渡島のたび 2012/2 その1 静岡県職員 溝口 久

手元に1/28発行の「島の新聞」がある。「今こそ佐渡独立論が美しい」と題した新春放談会の文中で紹介されている新潟日報の連載が気になった。食生態学者の西丸震哉氏の佐渡独立論を表題に「中央集権化は近代国家の必然であるが、これを無限に振興させることは、地域性、小地域固有の特殊性を封殺して、単一の文明、性格、体質、意識を仕立て上げ、生存の目的、人間性、郷土愛を無くして社会を砂漠化する。佐渡の独立論は、日本の縮図としての日本モデル地区であることに、その価値がある。小回りの利かなくなった制度大国を実証的に説得する立場となり、それによって日本を窮地から未然に救出することになる。」さらに佐渡島独立のための財源、そして産業、交通、エネルギーのありようについての提案が書かれている。これが連載されたのが昭和53年8月、すでに35年前のことだ。

この佐渡島に2月11日に渡った。

行くことになったきっかけは、地域を学び、地域で遊ぶためのヒューマンネットワークマガジン「かがり火」が、昨年9月に開田高原で開催した全国まちづくり交流会で出会った森ビルにお勤めの西村さんからお誘いがあったからである。次女が国体出場したアーチェリー会場のある山口県周防大島に応援に行った際に、西村さんが宿泊、沖家室島で民宿「鯛の里」を営む松本さんと呑むこと、周防大島町長らとの昼食を段取りしてくれた。見ず知らずの我が家族を西村さんの紹介だからと言って島の皆さんがもてなしてくれた。東京に行ったときには森ビルが再開発した六本木ヒルズを案内してくれ、とにかくいたれりつくせりのもてなしてくれるのだ。こちらとしても、もてなしの受けっぱなしでは恐縮至極だから、拙宅でのそば会に招き、浜名湖の案内もさせてもらった。

その西村さんから「以前、ラフォーレ新潟の立上げで新潟にいた時があった。以来、毎年2月にある「にいがた食の陣」に出かけている。一緒にどう？」とのお誘いに「新潟まで行くのなら佐渡島に足を伸ばしたい」と答えた。ならば2泊3日でということで2月10,11,12日新

潟そして佐渡島に向かうことにした。

新潟駅を降りた我ら一行を迎えてくれたのが、「かがり火」の新潟支局長の〇〇さんだ。いつもなら新潟市内には殆ど積雪はないとのことだが、今年は違う。スキー場に来たとのではと見間違ふほどの銀世界。このところの建設予算の縮小で土建業者が減り、かつ雪かきに慣れていないゆえ、幹線道路から脇にそれると雪のでこぼこ道が続いていた。

まずは朱鷺メッセの高さ140mにある展望フロア「Befcolばかうけ展望室」。え！こんなのもネーミングライツか？栗山製菓の土産物がたくさん並べられている。公共施設に観光的要素を組み込んでいくしたたかさを静岡県も見習いたいものだ。もっとも静岡県富士宮市ではコミュニティバスの運行経費をバス停オーナー制度として、ネーミングライツで一部を賄っている。

目の前に広がる日本海も降りしきる雪で霞んでいる。眼下には佐渡島に渡る佐渡汽船の港が見える。ちょっと先には新潟空港があり、ここ新潟市は陸海空の玄関口が集中的に配置されている。



朱鷺メッセを後にした我々が次に向かったのが、すぐそばにある「にいがた食市場」だ。

「日本海の獲れたて鮮魚から、地場産の野菜・果実、県産肉に新潟米や地酒まで、欲しいものが全部揃う、にいがた食市場！」がそれだ。市民の台所として、また観光客も大いに買う意欲をそそる施設になっている。すし屋もレストランも蕎麦屋もある。かつては魚市場だったところを再開発したものだ。駐車場には大雪にもかかわらず、関東一円からの車が見受けられる。さんまの糠漬、八目ウナギ、静岡県では目にしないものが数多く並ぶ、でも新潟に着いたばかりで土産物を買うにはまだ早い。昼食に「ブッフエマテリア」に入る。この店は十日町小嶋屋のへぎそばをメインに地元食材で作った惣菜をバイキング方式でいただくというもの。そばも食べ放題だ。これで1500円は安い！（続く）

ネーミングライツ：公共等の施設・設備の命名権を販売し、財政収入を確保する手法